

後編雜語筆記

乾

鷹
談
話

東
三
百
八
函

坤



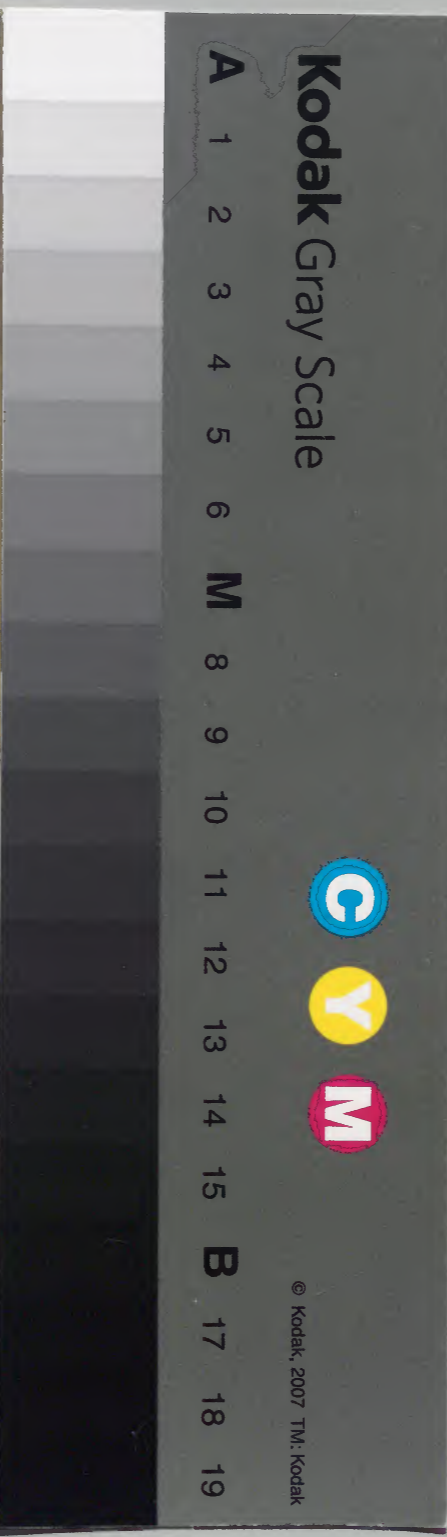
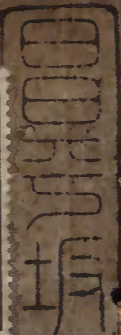
16

庫	文	閣	内
二	三	三	和
一	四	四	
架	冊	架	類

一

内閣文庫	
番號	和 34344
冊數	2 (1)
函號	211 16

共
二



糊等で貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



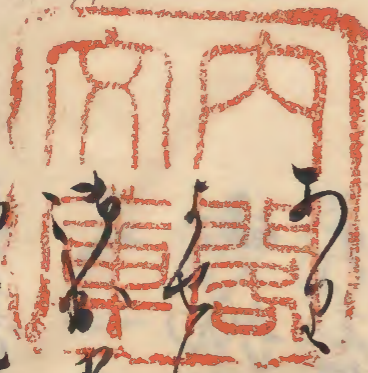
江戸白竜子著
天満口仕立揚子巡見之事

一慶長九年大坂陣の時十一月廿日
江戸口仕立揚子巡見之事

江戸口仕立揚子巡見之事

江戸口仕立揚子巡見之事
江戸口仕立揚子巡見之事

江戸口仕立揚子巡見之事



ありい多上御命正純安友帯刀屯
次成濃軍人正成永井右と吉吏車房
軽く割はまも少も山様移もかく
高ううう法入おぬされその後
兼向山く正端くま所を也法趣り
高きらぬと城中の石火矢城あり
あらぬうけりり行相こもん
まもとりくく法をまうまも
うううううううううううう

いあ一目くち城一 衆り
まのまもまもづれと法信人
神長成入りまもり 法地 地
まも^ままもまも道えん成らうへく
おまもりまもまもる中法友永房
号次製器正一と大剛層糧の大ね
少はらうはらうとあうらぬあのか
まもまもまもまもまもまも
まもまもまものし位まもまも軍

切手多し人名利者すはすれし
うのふん空用と知れしとてな
とてうせとりしとて

毛利元就陶尾津守合戦并上

坂田守と多し業入徳来しとて

一文、中国の探取大内合義隆と
彰を陶尾津守昭賢入道合義也
如何し如り尾津守進しとて合
天正或信年九月、義隆生書あり

陶大利とゆく大友系^{宗十}憐の意し

し、本河月防の海心親一、大内

の治く、唐一、大内義忠と号す、大内

元就、三人の徳成し、く、く、く、

き、く、く、く、く、く、陶の方

より、月防の、四の城、永来、丹波、

より、丹波、平より、智勇、とて、子

より、大内、之、四、城、を、た、之、終

是、心、大、内、の、心、也、陶、合、義、也、

方より社殿と云人罷あるより
中廻りく遊む一應列吉田之
首紙かたえ然も中の首紙も
外のよきくもゆきゆく日こ
あこにらるるきんもえ然ハ先達
て是よりしるもいしも不知神
彼をいせらるるく日あゆむ
初はと陶り方より是と軍にて
り限りる一物付え然りせり

あおとあはめて四箇の物と承
来丹波より方々内通目知れり
と酒をよ彼ののなはと軍
あり陶りゆく者一らせり
金姜大下 駭きくくく
おる丹後と依との名は山口
より居くるをより一え然より
自業業カ一内通中満是は
乃此城志一と人おと志を新

大立の浦より一尋陳を以て十月廿
八日元徳軍令渡りて一報あり
と云ふ二行武と云ふ一
その多かやと云ふ見と云ふりか
うんと廿九のころ大立のうら
陸を居りて一交り一地美の地
毎、船舟のりて一交り一
一帯と云ふ地あり元徳は神
は美人はと云ふ一海に立島船と

と云ふ二行武と云ふ一
地美の地
一帯と云ふ地あり元徳は神
は美人はと云ふ一海に立島船と
と云ふ二行武と云ふ一
その多かやと云ふ見と云ふりか
うんと廿九のころ大立のうら
陸を居りて一交り一地美の地
毎、船舟のりて一交り一
一帯と云ふ地あり元徳は神
は美人はと云ふ一海に立島船と

沙古らんと河らぬ光と
陶の流軍勢からり
飛ら元物に流軍勢より軍
法と志大しと人敷百人と
甲と例危の回球のま
滑ら形よりと天年法
多を山物本のあしと
口と向ふる一他例危の回球より
河日長に軍をねけ日長と押入て

と他一と地は吉田郡山の百人
案てえ就のらや一階えと大
おしと流山流とより
休養滝は若中坊のみ一
峯ふらと一と一と
山の積と炬と流分は人
炬火二つ炎りしと
おきしと一と一と
活地おしと一と一と

多しよあらしを我々あひの
ふちくと月あふせよと下知
しと雨の初よち立の浦比の
のよかしをねら大母を
る庭天と云しらあらん山と云
かし清和と云海海あやうし
とよ小風あれと云し多し
ま新と云し初よち立の浦
しよの西村うらひの浦

多しよあらしを我々あひの
ふちくと月あふせよと下知
しと雨の初よち立の浦比の
のよかしをねら大母を
る庭天と云しらあらん山と云
かし清和と云海海あやうし
とよ小風あれと云し多し
ま新と云し初よち立の浦
しよの西村うらひの浦

火と竹大角と移ち岡と上り
去り軍と岡幸しとより合
防きとやうと陸奥の一事に海
よりおしととととととととと
陶の言と焼とつ皆と岩井上
元就旗本とて先と切と
てととと東方の奥とつ声山海
印と海り天也と井ととと
類とる元就の事と井と海と
飯田中村三戸二屯四ととと
とととと陶の陳とととと
数百人討たると吉川元春定
陸奥福島身後志道とねと入
功と多宝女果の事と
栞合と切ととととととと
三浦敏中と二百人合ととと
耳と小川と百奈とととと
三浦と陸奥ととととと合と

中と突由やふらふと内なる内宛
りり合せて誠申の旨と諸事
計り申り他しと誠申の軍事
とと面しつゝ人切つゝり火を
ちらしつゝもつゝに陸奥の
高井形を二五年以下内海に
山形勅旨下あけ火を赤井左
ととの軍務中りといふ浦内と
高井陶り方江中より日中務

二百餘人吉川え春の侍り切つゝ
しとえ春の知しつゝ内宛に
とと人しるあつゝとあつゝ
とと内宛の旗本と百餘人を
のちん切つゝ切つゝ切つゝ
とと又と申すと合せり
下とて討つゝえれのみ旗本
陸奥とあつゝ切つゝ陶り旗本
切つゝ思ふとつゝの通案や

福永を後にしり 陶々をよ
りみ大方 陶々方より 眼仁
紙も 同お道に 捨棄人山く
りし 魚りし 魚とを 充て
る所 寺より 多り 取く 書あり
りれたる 月影を 陶尾 清き
余人より 乃 揚山の 也より
多り 元物と 無軍と 一より
河く 魚り 又 金葉と 交と せんし
多り 此より 卯の 刻より 年一 刻より
指或交の 刻より 此方の 負死
教と 志く 金葉 終る 亦し
塔丁 是く 此より 自害
り ねば 此の 伊賀 氏 山崎 勤
解由 又 人 自害 一 尸の 源く 隠
し 六 あり 一より 元物 七 尺千
七百 八拾 余の 首と 一より あり
生捕 八百 あり 一より 軍人 一より

より居て汝より去るもいしづ
二子業人え然に見玉内鹿止
ア知して金葉の首とるひま
うりめん年廻け立君大内義隆
の元君とあしあられ業丹十
まぐ昔徳に降る時中の所考
よりひましとちうつういん
まの北方津く陳や後一防府山口
と改しんとま交わり蓮美山の
城を杉葉の御もも降美とえ然ハ
うりて山の城とてあむり杉原アと
討果一防府山口と攻平けく
年三月をくも降をとり内防
長つとふふなけしと御りま
賜山の城とせあかし内後隆世と
うら果しと門の圓府とて信
大内より長陶あ房も同入席
一戦し赤やけくも橋をく日也り

江都散人津田忠房

衣被製衣之事

一 衣被の製衣は武川とありしに去年の秋被
衣被を甚く造るる人ありて人々の用ひの
時奢侈と好みしに服に被る者多しと云
ふるを御上皇の御成りの富まるる然
天威又新下して和するありて人々人
ら位の人とくして和するありて

或人三人の至人七人秦の事
為るの申りけりてその法
まよつたつて神の變化と何なるもの
俗よりのし年候とあるものあり
しるるに務負よりりるものあり
孫子の法好し其軍の備よきは
是こ作の好し其用かのみ
勢の多お信て云はらるるものあり
所のありのしなるものあり

秦苛政三章の事

一 秦の苛政を行て二世よりしてその治り
は法と三章の法とて其治るの事と
早より秦の苛政を行すものなる法
おより治る法と三章の法とあるもの
を河の人法と知きし故に秦の民
もくも腹しと天下を新治り

五ヶサコスタの鳥の事

一 五ヶサコスタの鳥の事

神靈感人獻之者吉之甚新焉可知矣
嗚呼世人唯知忠行之勇未知其意也
其勇能至血氣而示此忠義也及義
經之出真名者從之元之志守其射爾王
公者不及其之義守其拒昌德則首干
極誰何野字者在芳野令祥女舞
曲則首干城德保之為計年又其義經
之衣則首干又純行凡年其入居後
居則有者忠廉身之意其年况之義經
之存元未可知年其善有市之相周而自
觀則害未始就哉若相遠矣由是觀之
亦可謂正義也士為知是已者死概謂忠
行忠於義彼不忠於賴於哉若史其申
不成則命也於義何誦成敗年若荆軻
雖既設千軍者余情介壯士聞忠行
勇彼不慷慨原則其人亡則其畏者
忠者亦何誦七年存年忠行報死而七
者唯在此境鑿年明明宜小大也傳

持為取珠石亦可年庚歲有義有勇
永振家聲也其心忠信而已
大守清原素德其事於是乎記

覽永三年九月十日

昆山人道春書

又

案又內地政勝君清素記其家新修
忠行男事嘗聞此中貴長亦必心賜
中務少備忠務甚勇必則人皆所知也

忠勝心傳千也則左身忠新心也
甲丹左身政新政新心也傳千君其累世
富可知而已按夫中華之堯登始自
也切之跡登而後臨軍該古之用之
也於天子則王我於諸侯則諸
新軍穀於方丈則郊至之新同蒙其
際魏年之三屬秦古之科願有多力而
著焉有跳躍而脫焉如量而編本朝
之武裝權害自神代制行於人世方哉

事之盛也源左産心在物然其傳自盛
唐漢至豐傳之加旃義貞存也其
或之小結世皆稱羨其教傳矣而左君傳
此中必為武庫之寶也其也利器之多且
備整又不可見焉夫人之惟甲冑記其惟
干戈者厥躬然則記其法制有躬
教悔思而勉之則可也全身可也克勤
兵保邦家之為也惟之干城新朝守
益在茲年元氣甲列古也既使余為之
記以函忠行事今亦應君之求之再
申銜筆

實人永拾七年七月中院右辰

民部卿法下道書

書之雜列其男子也

一世ふらるる事多き中ふ何のふらるる
けしほりらふる事あり書女何
雜列もふ男女のふらるる男子と

方ふとてのくゆるは歌列の書し
道りたをたといふ事は何の道記とて
何の時より始りし事とあるや人を疏
陽神降りて天地の万物を成す
成就せよとあれど男子女もともに
人として夫婦互ひに陰陽和合して出
生しるるありわの理をといへり
男は多かぶるに歌列して母
をも果に之をといふをあるも實
不仁の事しは方しりるや事
を天下古今のまはのしくし得る
口をしり母とて所り歌列
をし得るを事や

巻の五 媛の鏡金の階登る事

一 新父男なるかて事なるか
とて一 主なる父の家のこと
とありしははしらの原重し
あるは今もいふありしに百女

もしも下或る百石あるまゝ
世にのこりし金指とて年々見せ

に何より何一ありあや

他一より一
増しのり次

さうしての十方一と云ふ一百万に於てあるまゝに二倍あるが
割合にしては金と云ふものよりさういふのまゝと云ふこと
るまゝと云ふ二倍あるまゝのちをせんそよ
りのと云ふは一はつと云ふや **好小服あ**

ふ一は一家の中をよぶと云ふは物月のもの
ありといふと世の金指打ち末の事
されは化人と云ふは一はつと云ふと
血みやと云ふは一はつと云ふは

名がら一はつと云ふは **武士** 一はつと云ふは
そのおすどと云く血脈と相結するは
と云ふと云ふは一はつと云ふは
身に對しての規程と云ふは
ゆつと云ふは一はつと云ふは
あり一はつと云ふは
の武士と云ふは
名は末と云ふは
まのまゝ一はつと云ふは

質の事あるいと如の親はけれ
た小身なれどもむすめのみまじき
人けおるゆしまりしり大勢の人
るれ共一れりより多くくの
令路のし如くはけく遣は事しある
へ一尋常の人と令路何つてむ
事はある事ありあま他一甚如
人さるれ悪女なるれ或は一男を
る如事しあははえより令路と
らしそやせぬ方々令路と行へ
とさしむしや卒あるのせ賢れり
令路とのし或は令路とのし如く
人さるれ是れ令路の事し
大勢の如くはけく遣は事し
百の如くはけく遣は事し
最業の如くはけく遣は事し
さるれはけく遣は事し



東武敬人勝久編

鳥丸光廣御詠歌之事

〇分

一 慶長^{八年}癸卯年八月十七日江戸下向

の時は列に並ぶく一人ののよひ
如くぬ社の大風御詠一うめは
四邦一首とすしやふ

行ふよりをすかゝるの川
毛もみーぬの袂のあふふ



東武敬人勝久編

為丸光廣郷誣歎し事

〇万

慶長¹¹癸卯年八月十七日印天下向

の時は別とあるふく一人とのこと
如くぬ社の大風ぬ傳へしうぬげ
心邪と一首とすしと

行ふよりあふぬかぬあふぬ川

毛七み一ぬの糸の意ふ

つらきとふは花に生して人ぬ
るしきふいつとるく白鶴をぬ
おり長くたしし千年のちあれも
あふえんしんく又天くふ鶴の
或るまへまひたり天長帝の
白きまのひまへおのしむて大
樹のちまひに花もりくこのこと
まのよこしむる

花のつらきとふは花に生して人ぬ

ふらふやまの鶴とるく

あふしし千年はあしな鶴の

知るしむる秋の鶴のあ

破花唐のちやくちん寶慶のちら

ちむる萬葉集りしむたのしむる

のふる又賢も御 秀色の人と一期の

秀秋あり秋の夕とつふ歌く

花といふ相の花のまもりも

のらつき溪の夏の夕らぬ

後水院殿感成よりつくりし中洞の
制洞心ゆきし事也

奥列九三指川一揆涉征伐
之事

一 天正拾九年五月、奥列南約成
内にて九三指川征伐成、改定指川因成
事、交負亦成、一揆と記し
編史官左井根判之、一揆と記し
節、是れ也、押成、凡て、今、南約大

昭吉、佐、直、より、加賀、崎、お、利、也、
近、也、あり、秀、一、公、軍、一、石
き、り、流、成、あり、一、と、り、下、由、園
白、秀、次、り、は、入、大、綱、之、源、家、藤、久
と、大、物、一、と、り、一、疾、宰、相、系、勝、也、
の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
進、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
後、世、源、正、少、所、也、政、成、老、節、力、在、成、
吾、子、守、之、知、か、補、也、政、成、南、約、大、指、吉、

位重教令の勢八万の千餘人有り
御之に命津有り子丹の御子や
桑之に葡萄酒大酒中の一樽
蟾起し九ノ戸と一味一太凡
六万案々所々にそりて飲る
ちり進者秀吉も是と年一
志しし中品菓有く伊達好果
俄又山脈とりしれは仁ゆり
四万式して秀吉の敵敵とせり
吾下あたは八万の千にて山道
なきしと方候をわめは方氏郷
一に中より水の中害多し依り
とる方候はならんかあはん
ありり葡萄酒大酒の一樽
進治二成り着候と多く軍切
とる勅出候にこそ方ともし
中入しし理に成功とぬま
ふとて候ししとて候とぬま

高野のより 西に押寄 七月二日
よりより 浩くせし 船の 城の中
酒と 防に 敵の くるの 勢も
多し 山に 入る 山宗は 兵
充事 新に 兵を 遣は 兵を 遣は
大條 尾津 中月 大寺 以下 新と
りつ くる くる せし くる 勢も
兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は
取寄 千 或百 解を 赤りり 兵を 遣は

取と 兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は
大寺 中月 梅花 兵を 遣は 兵を 遣は
皆く 同 際 葛 西 中 中 中 中
兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は
取寄 兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は
と 兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は
兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は
と 兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は
兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は
兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は 兵を 遣は

宰相利家大御方の古侯長光
もむらじりて西宗宗頼のしり
奴如れ義隆とりつてははひ難
多く難をい侍ふて我々宗の
もく葛西大後も西宗の
もりもきりて西宗に
の御りれも自らしと安んせ
秀吉、宗と何とて
反也一飛科と補ふて
志とさるてけ交一擧進治
け。果して大切と年より
孫義の新擧擧人任勢も
是とてはらんとて後始てけ交
心交とまへん一擧進治ある
事一はたて 神皇正統記
との西軍ははなれ
もくはらり西宗とて
廣の大京の心養夷攻夷

中国の地を御覧と云ふに
と東衛の地を御覧と云ふに
石を御覧と云ふに
らまを御覧と云ふに
高を御覧と云ふに
あやと云ふに
一 氏御覧と云ふに
は御覧と云ふに
秀吉と云ふに
り宗の御覧と云ふに
船形の御覧と云ふに
御覧と云ふに
と云ふに
く云ふに
と云ふに
余り云ふに
九の御覧と云ふに
御覧と云ふに

とら〜武方案添十三版
際と分々軍法と定メらる
七月廿四日一會津とら
辛れらるが一統々深地を以
井海軍及場尾吉盛等と
發向とて海軍中とて新
仕玉より一揆のありたると
破つり要害たると破却しあふ
味方の敵とておまふ所はあ
かー入らる初に九、節ら
九方の隠れえ左井とつら工に
つらつらとていれえと備
源左衛門の台添とてとら一知
しつら色つらふせめつら
少物中のとらと交とせん
防中とらつらとつらと源左
下知しつらと身とてふのり
とらつらと石屋表内坂九物と

し人の源をりし先をきくを
書登と名をきて堀とのり哉
二人名花とるし討死を忠
義のつとめを平御しとる
のり也結くびにく珠地まのり
あふま方ね透るちくせのり
とるをきくあふし大のり
のり也のりてかたは後地
攻りり世にし野交第て出るを
後地名を同源をきく左田のり
溝口をきく少向もあふのり
あふしに堀のりつと歩破る
はるあふし大のりのり源を
り知りてあふるちとる
りれはるに軍をきく堀のり
堀のり也あふのりあふのり
実名を源をきくあふのり
あふのり也あふのりあふのり

切て成りしと一政不知しと
を人なれらむを討しりし時
のともし一利城の上隈と云ふ
余人後詰しと云ふ井と云ふ
左殿目と云ふ田及中書りし
門前今古の寺村中なる者
所京海左の新聞上隈と云ふ
のともし利城と云ふ一と云ふ
魚け成りし教にお説かぬ
海に舟乗取の直隸交と云ふ
一と云ふ利の城の中隈と云ふ
城と云ふ魚と云ふと云ふ
うけしれんをと云ふ
右時に成りし家名事い
也と云ふ九と云ふ城と云ふ
是と云ふ一と云ふ城と云ふ
城と云ふ利の城と云ふ
也と云ふ一と云ふ城と云ふ

氏とのえは、所、招利、官、左、井
て、貴、折、は、て、法、後、の、り、
左、内、蒲、と、千、代、壽、丸、蒲、と、左、内
山、年、た、小、倉、孫、作、り、後、と、え、と、
可、し、せ、し、り、
坂、尾、帯、力、若、廣、程、け、し、え、と、
ら、ん、と、さ、ら、ん、あ、と、り、の、た、り、
と、ん、し、と、文、の、と、え、と、の、た、り、
是、と、り、え、と、は、一、人、と、あ、り、
旬、う、り、れ、も、帯、力、る、上、より、大、音
あ、え、ま、の、子、ゆ、ま、し、と、り、と、系、各
意、部、の、は、お、ち、し、の、の、り、れ、と、
通、ん、し、と、は、と、り、と、兵、の、り、破
て、と、り、し、と、の、ち、り、と、れ、は、
法、軍、場、と、し、と、り、と、の、お、ち、と、り、
氏、部、の、え、孫、と、り、と、り、と、り、と、り、
り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、
法、お、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、

おしりしめく物尾の人故堀へ
しりしめく物尾の人故堀へ
の或ちしめく物尾の人故堀へ
物尾の人故堀へ
味方のも負死人とみみ
堀を帯刀し物尾に
下知しめく物尾の人故堀へ
く堀を帯刀し物尾に
物尾の人故堀へ
秀次が 敵康との事知るか
とやめし物尾の人故堀へ
ありし物尾の人故堀へ
白旗を掲げていし物尾の人故堀へ
氏江を伴ひし物尾の人故堀へ
川を渡りし物尾の人故堀へ
堀中のうす物尾の人故堀へ
物尾の人故堀へ

物尾の人故堀へ 巻九ノ戸

保の支天正拾八年のよりふきり
其より坊尾常力にてりて
氏々の先保とのり城九ノ
テノ城とせめとのり其せん功
えく秀吉よりより陸奥城と
常力下きりしとさのせり
所よりよりて大々よお慶あや
何れも其より一合戦の年月
次りとお慶せり小湊居

何れと軍一とあや
まりと志
海軍

一 坊尾常力は其の城を攻め
とせり其の是れ一と物とせん
初とせんぐんとあのり九月
その卯一と勢斗
二ノもく攻めり治士一と城一と
入城りて城中のやらら格部

降参すよきよつてはひの秀功
お康とくをこし命と助ヶ京越
こききとくこ九一か一奉ぬと
まけこり九戸校と巡指の因勝
おは孫おの武士と分て お康の
四座市こ校まてはせお中の
士夫或ハ女のぬらひの道か
男ハとくこりこ九のきん押
燦軒と大りて四方か火とつけて
あさりのとらら降炮えお殺し
或千ハる指も人皆死つとわ
るここ九戸城を去しとあ均
扇まらりのらお大お分あるとん
ちと志んありたれと 上使と
ふまは石田治が備に成下向して
こ校とく校とて因復四復あり
首と京越あやせら 神君
こ内とらと四取ありとておはひの

城守を清任せしめ次子伊集
政宗も領采はとるも西
土崎くろしきも伊集政宗
居城より領地先祖より
伊集政宗も井郡上下奥羽田村
垣の村伊集信実所領合せて
土部と伊集より田加増と
りしりおなせ七郎伊集と
よみはのめともいふに下り

あふり別所の伊集権也一石月
ありより伊集と伊集と伊集と
百部権八方おとる伊集と伊集と
正宗と先祖伊集代のお伊集より
伊集のお伊集と伊集と伊集と
伊集の伊集と伊集と伊集と伊集と
伊集と伊集と伊集と伊集と伊集と
伊集と伊集と伊集と伊集と伊集と
伊集と伊集と伊集と伊集と伊集と
伊集と伊集と伊集と伊集と伊集と

一横おうりうんをきりあふり
まじしひ道せちお田八彦彦
内給式人まじしひに内と海に
うらとあひく氏おのまこ
入く弟次何く案よあまこ
百好まこ一横とあらまこ
を氏お小母けしけ信く氏お
まこあめまこまこあふあ人乃
海にお渡れし信く一横と金係
あつららまこ新にまこ八彦彦人
珠身しりまこ正宗つてあまこ
せんまこまこまこ又とあつらり
正宗上洛をまこてお母あまこ
と破職あつらまこ此件のおとまこ
海にお渡れおまこつておちお田彦
まこまこまこ右まこらお判取を
似也謀書付しまこの抄取はあまこ
判まこまこのまこまこかくして

有るに國の大名とふれし
けしものしとてししわもふれ
とと代に其申すらししとん
上程おとて聞ケル所縁より
外申りし是は慶應元年
六月一日六年にすし
初に合戦しし正宗上程
うらまふししし先祖の
伊達飛人頼宗の傳りし
値の活ししとるまふりて
華夜二夜八ふとぬしし
まを英九の早のわすく内
もふと頼の殿長源同大
義ふらふししとらまふ
しかりとれりしとて
源忠房忠務の代に正宗
申りしと南動信房も利
山城もすしとて正宗し
中道

けかきしりし命律事おれ
と上校中務と南朝主を
二の入魂しそは二人の面
うめ西宗とふくこあふく
何事し世外より命律事
合辭してこ方より西宗と
果しりんよの内をくはて
命律事おれと上校中務との南朝主
世に人ちうくおれしよ命

うりしりし二人大馬よりつれ
ゆりしりし南朝主のこりありそ
うんつりし旁こりしし上校
湯西及命律事おれとをいんく
南朝主のこりし事らてし
考られしは南朝主とよれ
のりしはのりしあれし
のりしはのりし命律事
まをいんて彼女よと命律事

